

10-12 初めての大規模ダム現場での施工管理

1. 立場と仕事

入社11年目で初めてダム現場へ5ヶ月の応援で赴任した(それまで高速道路や新幹線の現場を経験)。職員が70名在籍する現場JVの工事係として現場施工管理を担当した。

名前と顔をようやく覚えた頃に一旦転出したが、3か月後に戻り、その後7年弱在籍することになった。

2. 遭遇した事態

ダムの現場は、コンクリートの打設一つを取ってもスケールが大きく、しかも多工種で、そこは高低差の大きな現場だった。骨材採取・製造、コンクリートを製造し品質管理も全て行い、今まで経験したことのない現場管理が行われていた。最初は雰囲気にもまれ新入社員と同様先が読めないありさまだった。測量には自信があったけど、やることなすこと一から覚えなくてはならない状況だった。

他の職員は1年目、2年目にローテーションで色々な工種を経験したが、自分は構造物のみを担当させられた。上司から、「この現場を経験したら一人前のダム屋だ。他工種は時間を見つけて勉強しろ。」と指導されたが、担当業務をこなすのに精一杯の状況だった。大規模なコンクリート打設、支保工の補強など、未経験の状況にも直面した。

3. 対応内容とその結果

自分が納得するまで施工管理を現場第一で取り組むことにした。担当の構造物以外の他工種については、時間をつくっては現場を視察し、また文献でも勉強した。

大きなことも、一つ、一つの積み重ねで関係者が協力して完成させられることを知り、人材が大切であることを学んだ。また、安全パトロール等を通した若手チームの連携にも努めた。

新規工事には率先して緻密な施工計画を立案し、予算を作成し、それによる予算管理を行った。未経験の状況には、上司や関係業者とも相談しながら対応した。ポイントは、高低差を制するための施工設備計画だったと思う。

これにより、ダム技術、現場管理の基本を習得した。1年、2年目はダムコンクリート工、3年目以降は新規工事を担当し、計画から予算まで一括で任され、仕事のやりがいを痛感した。

関係者から信頼され、以後の人脈を築くことができた(JV内他社とは「同じ釜を食う仲間」としても、発注者とは丁寧な説明等により以後の信頼関係を構築)。